Movie Review　28　#ミツバチのささやき

『#ミツバチのささやき』(1973 年、ビクトル・エリセ監督）を NHKBS で視聴した。スペイン映画記者協会賞、 最優秀作品賞、最優秀男優賞 、最優秀監督賞を受賞。

『フランケンシュタイン』(1931 年、米国のホラー映画）との出会い、ミツバチの生態と少女の逃亡者との一時の交流とその突然の断絶を幻想的に描いた映画である。時代背景を知らなければわかりにくく、映画の解説を読んでわかったことが多い。本作はフランコの独裁政治が終了する数年前に製作された。スペイン内戦終結直後の 1940 年を舞台にしている（内戦後の国政に対する微妙な批判を匂わせているそうだ)。

1940 年頃の小さな村にトラックがやって来て、公民館で映画会が始まる。映画は『フランケンシュタイン』。その観衆の中にイサベルとアナの姉妹もいた。帰った家の寝室でアナが、なぜ怪物は女の子を殺したのか、なぜ怪物自身も殺されたのかと問うと、イサベルは何もかも知っているという口調で、本当は怪物も女の子も死んでいない、あの怪物は精霊であり、目を閉じて「私はアナ」と呼べばお前の前に現れるのだ、と答える。
高齢の父は養蜂の仕事をして、深夜まで思索に耽ってはその内容を書きつけている。母は毎週のように誰かに手紙を書き、駅にその手紙を出しに行く。二人の仲は冷え切っているようで、会話もあまりない。
イサベルとアナは仲がいいが、イサベルは素直なアナを怖がらせたりびっくりさせたりして面白がっている。
ある夜、村の郊外で脱走兵らしき男が列車から飛び降りると、荒野の中の小屋に逃げ込む。翌日、アナがひとりで小屋にやってきて男と出会う。アナは家に帰ると、父のオーバーと食料を持ち出し、小屋に戻って男に渡す。男がオーバーのポケットを探ると懐中時計が入っている。その夜、銃声が響く（男は射殺される)。父は警察に呼ばれ、射殺された男が自分のオーバーを着ていたのを知って驚く。翌朝の食卓で父は、アナの表情から彼女が事件に関係していることを知る。アナは小屋に向かうが、そこには血痕が残っているばかりで男の姿はない。その後、夜の森をさまよっていたアナが池のほとりに座っていると、フランケンシュタインの怪物が近づいてきてアナの前に座り、彼女に手を伸ばす。アナは目をつむり、そして気を失う。
翌朝、アナは無事発見され、家に帰るが、口をきかず、眠らず、食事もしない。医者は母に、アナはショック状態だがやがてもとに戻ると告げる。その夜更け、

アナはベッドから起き上がると寝室の窓を開け、イサベルに教えられたことを思い出しながら目を閉じるのだった。

識者による映画の解説
・主人公アナの家庭が感情的に分裂している様子は、内戦によるスペインの分裂を象徴している。
・廃墟の周りの荒涼とした風景はフランコ政権成立当初のスペインの孤立感を示している。
・父親はミツバチの生態に対する嫌悪をあらわにしている。これはフランコ政権下での、統率がとれているが想像力が欠如した社会を隠喩している。
・アナは当時の純粋な若い世代を象徴し、姉イザベルのうそは金と権力に取り憑かれた国粋主義者を示している。

映画『フランケンシュタイン (Frankenstein)』はメアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』の映画化作品。世界的に大ヒットし、モンスター役を演じた俳優は、怪奇スターとして世界にその名を知られた。

フランケンシュタイン男爵家の嫡男である若き科学者 H は、生命創造の研究に没頭していた。墓地から盗み出した死体を接合し、恩師の研究室から人間（後に殺人者と判明）の脳を盗んでくる。嵐の雷光を利用して高圧電流を浴びせられた死体は生命を得る。
その後、地下室で同僚が怪物に殺される。そこで怪物を始末しようとしていた別の同僚も怪物に殺され、怪物は塔から逃げ出す。怪物は村外れの民家で出会った少女と交流するが、不意に彼女を湖に投げ込み溺死させてしまう。最終的にＨは怪物を始末する決意を固め、村人を引き連れて怪物狩りに乗り出す。山奥で怪物を発見した H は殴り倒され、風車小屋に連れ去られてしまう。村人が風車小屋を取り囲む中、怪物と対峙した H は屋上から投げ捨てられて重傷を負い、怪物は村人によって火を放たれ燃え盛る風車小屋諸共崩れ去った。

モンスターの「面長で平らな頭部に広くせり出した額、首から突き出した（首に刺さった）ボルト」といった容貌は、本作でおいて造形された。モンスターの印象が強すぎた為、創造者の名である「フランケンシュタイン」が、本来名前のないモンスターの名と誤解されて広まってしまった。